

躍進 京滋の中小企業

シルク独特の光沢や肌触りの良さを出すための加工「精練」や染色を行っている。「精練」や染色を行って。風合いを損なわずに家庭用洗濯機で洗える技術を開発。昨年、関西ニュービネス協議会のN BK大賞最優秀賞や、京都産業21の京都中小企業特別技術賞に選ばれた。

戦国時代の1555年に創業し、71年から明治維新まで皇族の衣装などを手掛けた御寮織物司の井関家がルーツだ。会社設立は、1970年と比較的新しい。絹糸の用途を和装以外にも広げることで、技術の継承を図ろうと考えた山内克純会長(71)が、独立するにあたり、手狭な京都・西陣から水質の適した亀岡市に移った。現在は長男の伸介さん(41)が、社長を務めている。

精練では、絹糸をぬるめの湯に通した後、特殊なせっけんや酵素を用いて、表層を覆うタンパク質・セリンなどを取り除く。その後すすぎや脱水、乾燥などの工程を経て完成。最初はクリーム色がかっていた生糸が、白く、柔らかな姿に生まれ変わる。

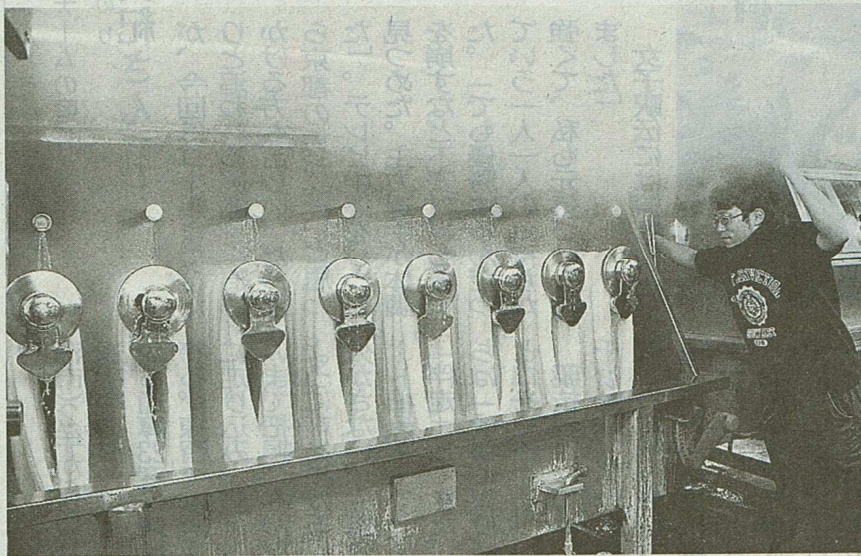


1月13日
月曜日

京都新聞社
The Kyoto Shimbun Co., Ltd.
© 京都新聞社 2014年
発行所 〒604-8577
京都市中京区烏丸通夷川上ル

山嘉精練

(亀岡市)



普及の鍵を握る「洗えるシルク」の研究は、長年の弱い人も守ってくれる特長が、コーティングすると消され面を樹脂や撥水剤でコーティングしてしまう」と指摘する。グする手法だが、山内社長は「シルクはタンパク質でできてお構造を操作する新しい技術を十

①湯気を上げる絹糸。ぬるめの湯に通して繊維を膨らませた後、精練を行う(亀岡市千代川町・山嘉精練) ②新技術「SHIDORI」で加工した絹糸



数年前に開発。さらに洗濯を繰り返しても硬くならない工夫を加え、2012年11月に新たな技術「SHIDORI(シドリ)」を完成させた。価値を認める大学の研究者やデザイナーらを加え、同年には多様な分野で活用を進めていく組織「シドリ・クリエティブ・アソシエーション(SCA)」も発足した。目標は、日本国内で絹糸を扱う技術をさびさせず、継承していくこと、という山内社長。そのためにも、「時代のニーズに合った商品開発に引き続き取り組むたい」と力を込める。進取の精神を忘れず、これからも伝統を紡いでいく。

(笹井勇佑)

洗えるシルク 光沢守る